

# 景観要因の美的考察 1

研究代表者 黒川 威人  
共同研究者 藤浦 鋭夫  
山岸 政雄  
服部 光彦

## はじめに

この研究は、昭和56年度文部省科学研究費の助成を受けて行なった「景観に与える人工の影響の美的考察」の中心をなすものであり、ほぼその全容を示すものである。

筆者らは既に数年以上前から、都市あるいは街路における様々な景観の問題に、いくつかの研究アプローチを試みているが、<sup>注1</sup>本研究ではそれらの後を受けて、専攻を異にする研究者<sup>注2</sup>の共同研究により、さらに広範囲に、しかも深化した内容の成果が得られることを目論んでいる。

即ち、これ迄は単に、色彩やサインやあるいは塀（家屋外構としての）の研究など、景観要因としては、それぞれ一要素に過ぎなかったテーマを、一つのまとまった研究として集大成することである。

残念ながら、諸般の事情により、当初計画に比べ、研究内容は縮小せざるを得なかったし、それでもなお未終了の部分も多いのであるが、いくつかの新しい知見を得ることができたので、これまでの成果を取りまとめ報告するものである。

## 研究目的

「景観」の語の意味するところは広いが、本研究ではこれを「街並景観」とし、就中特定の美観地区にはこだわらない「一般街路」を主な対象としている。これは、極く日常目に触れる街並において、何がその街の美観を決定し、あるいは阻害しているのか、をつきとめることが

美しい街並景観創出のために、欠くことのできない基本的な問題と考えるからである。

但し研究遂行上、より多くの手掛りを得られるのは、全くの新興の街並よりも、土地固有の風土、歴史性に醸成された遺構の混在する街並であろうとの判断から、金沢と京都を対象地として選定した。なお、歴史的遺構を生かしつつ新市街をいかにデザインするかは、今日急を要する課題の一つでもあるが、古いものと、新しいもの相互を生かす、真の調和のためのデザイニング的、美的問題をさぐり、もってそれらの原理的解明に寄与しようとするのも本研究の目的の一つである。

## 研究方法

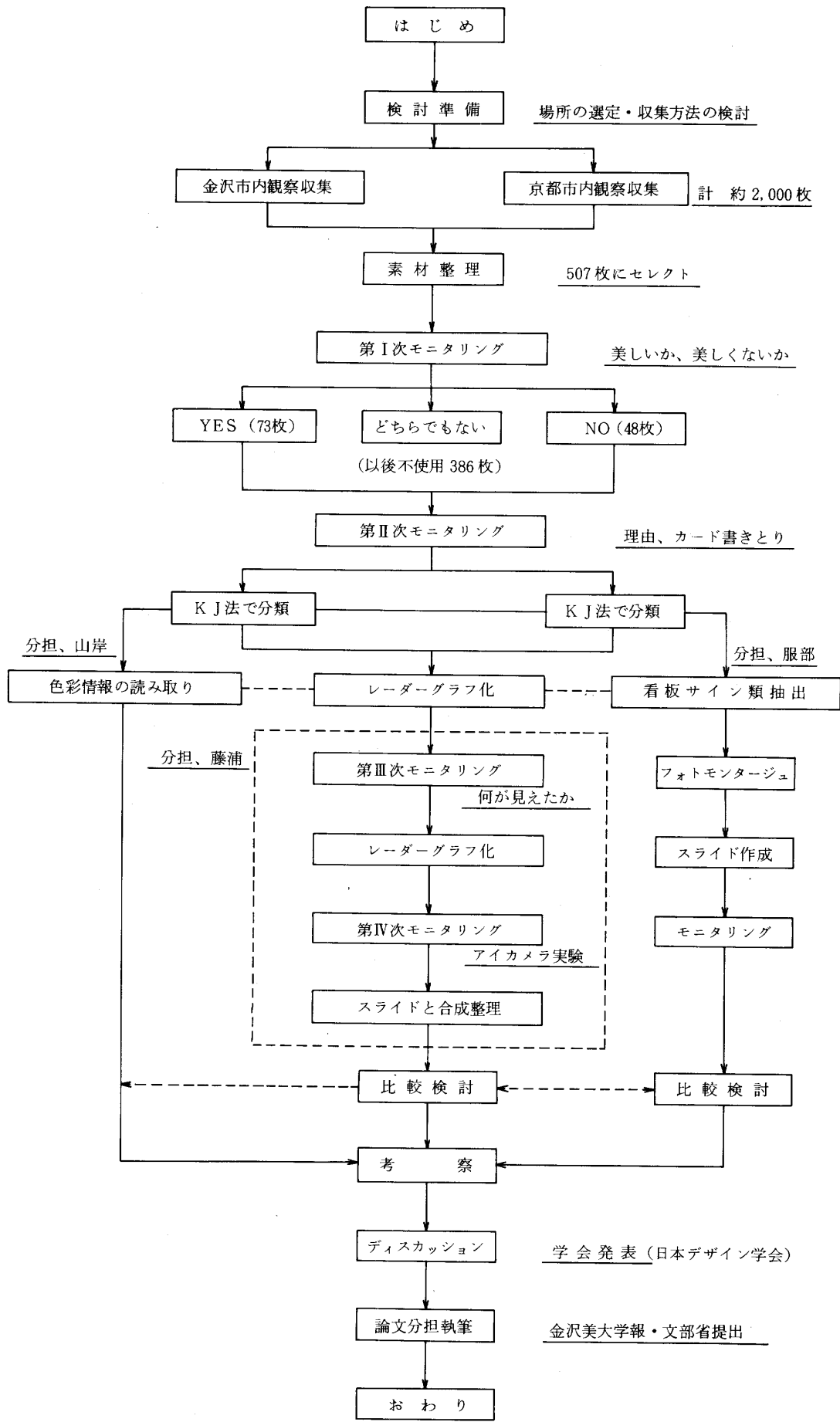
具体的方法としては、選定地の中で一定のコースを抽出し、その全域にわたって写真撮影を行ない、得たサンプルスライドによって実験（モニタリング）を進めたが、本研究の特色として、なるべく多くの景観因子を対象地から見だし、その読み取りと分析によって、景観要因の美的評価への影響をさぐろうとした。

以下流れに沿って説明するが、研究全体のフローは図1を参照されたい。

### (1) サンプル収集

サンプルとなるスライド写真の撮影に当たっては、そのコースを金沢らしさ、京都らしさが適当に折り込まれるよう配慮して下記のように設定した。

金沢：城下町見て歩きコース（寺町コース、中央コース、卯辰山麓寺院群コース）



京都：北野＝御所＝木屋町通り＝四条大橋＝八坂神社＝清水寺＝伏見

なお、金沢市内は全て徒歩によったが、京都においてはスケールがやや大きいせいもあり、自動車を利用したので、サンプリングがやや粗くなったかも知れない。京都のコースについては市内在住者の助言を取り入れた。

撮影方法であるが、当初機械的に何米かのピッチで四方をパノラマヘッド<sup>註3</sup>を使用して撮ることを考えたが、結局無駄が多く発生することが判り、交叉点や曲り角、変わった建物などで、景観の要因が変化したと思われるポイントに限りそれも自然に人の眼が見るであろうと思われる写角で撮影した。カメラはミノルタX700、50～70mmのズームレンズを50mmの標準にセットしPモード（自動）で撮映した。フィルムはコダックエクタクロームを使用した。

実施時期は11月下旬から12月下旬までの1ヶ月で、晴天日の午前10時から午後3時までの時間帯を選んだ。

## (2) サンプルセレクト

得られたサンプルスライドは約2000枚に上ったが、光量不足など写真としての失敗や、景観資料としては不適と考えられるものなどを除外し、また同じような景観のものは1枚で代表させるなどで、結局507枚を正規のサンプルとして残した。なお、セレクトの判断は4人の共同研究者の合議によった。

## (3) 第1次モニタリング

約15名ずつ2回にわたって、計30名の被験者に、集団反応測定機<sup>註4</sup>を使用して行なった。被験者は本学学生（デザイン専攻）で、事前に本研究の主旨を説明し、判断規準の例を次のように説明した。

「美しい」とは、整然としている、スッキリしている、情緒がある、きれい、好みだ等、良い印象を与えるもの。

「美しくない」とは、この逆で、無秩序、乱雑、不快、嫌い等、印象として悪いもの。

「どちらでもない」は、上記のいずれとも判定し難いもの。

押しボタンは端から「美しい」「どちらでもな

い」「美しくない」の配列とした。

各スライドの映写時間は15～20秒であったが、これは集団反応機の不調により、数値の読み取りに若干時間を要したからである。計測はしていないが、被験者の反応そのものは2～3秒の間に終わっていたと思う。

集計は3つの数値のうち、最も大きな得点を得たものを当該分類として仕分けた。この結果「美しい」は73枚「美しくない」は48枚となった。

## (4) 第2次モニタリング

ここで386枚の「どちらでもない」カードは放擲し、残る121枚を使って再度モニタリングを行なった。

予め前半の73枚が被験者によって「美しい」と判定されたものであり、後半の48枚が「美しくない」とされたものであることを説明し、1枚映写毎に、それぞれ判定の決め手になったと思われる事柄をカードに記述させた。

被験者数は10名であるが、都合により第1次モニタリングの被験者で揃えることができなかった。

スライド映写時間は各10秒で、筆記のためのインターバルを20秒とした。この実験の結果、1140枚の因子カードを得ることができた。

## (5) 因子カードの分類とグラフ化

「美しい」727枚「美しくない」413枚のカードを、それぞれ床上に広げ、KJ法の要領で、同一の要因と思われるカード同志を拾い集めて分類を進めた。なお1枚のカードに複数個の要因が書かれている場合、特にことわり書きがない限り、第1番目に書かれた要因に拠ることとした。

この結果第1次分類として「美しい」が49項目（因子）「美しくない」で24項目に収斂することができた。これらの項目は小タイトルとして残し、さらに分類を進めた結果、それぞれ12の分類肢となった。これが表1～2の12コードである。

ここで得られた分類表は、カードからの情報の総体を把握するには有益であるが、1枚1枚のスライドに関し、どのような評価がなされて

表1 景観因子細目一覧表

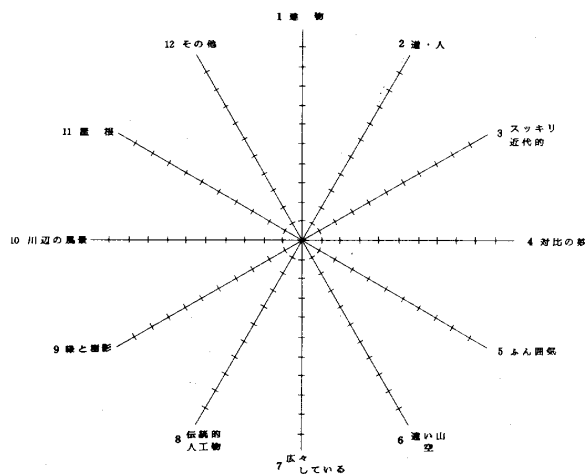
「美しい」景観因子											
コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル	コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル		
1	建 物	13	9	・古い街並	7	広々している	8	6	・広々とした自然		
		11	10	・建 物			7	4	・広い空間		
		10	7	・寺 社			2	1	・公 園		
		22	13	・古い建物			計		17	11	
		13	3	・城			8	伝統的 人工物	22	8	・格子戸・すだれ
		25	4	・タワー					31	12	・石畳・石段
計		94	46				16	3	・赤い鳥居		
2	道・人	10	2	・舞 妓			44	20	・伝統的塀・門		
		21	8	・広い道			8	6	・石 垣		
		4	4	・曲った道			3	3	・その他の伝統的物		
		18	8	・坂 道	計		124	52			
		43	26	・その他の道	9	緑と樹影	41	31	・木々がある		
		5	4	・道と背景			17	6	・街並木		
計		101	52			7	5	・樹影・木陰			
3	スッキリ 近代的	4	2	・近代的			30	14	・緑がある		
		13	8	・スッキリしている	計		95	56			
計		17	10		10		9	4	・水に映る風景		
4	対比の妙	5	5	・対比の妙			41	11	・川のある景観		
		35	15	・色の美しさ			9	4	・橋		
		5	1	・瓦に雪	計		59	19			
計		45	21		11	屋 根	5	4	・屋 根		
5	雰囲気	11	11	・おちつき			14	8	・屋根瓦		
		8	7	・古都らしさ	計		19	12			
		6	4	・下町情緒	12	その他	4	4	・上天気		
		3	3	・明るい雰囲気			4	4	・パースの美		
計		28	25			20	15	・その他			
6	遠い山・空	8	5	・青い空	計		28	23			
		6	5	・空		分析不能	78				
		11	7	・遠景の山	合計		727				
計		25	17								

表2 景観因子細目一覧表

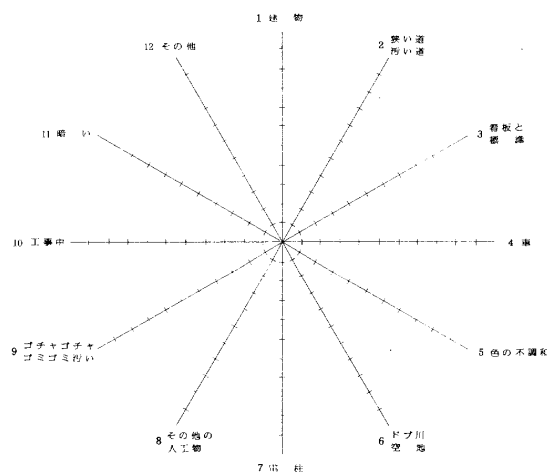
「美しくない」景観因子															
コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル	コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル						
1	建 物	33	24	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建 物</li> <li>・家の壁</li> <li>・周りと不調和</li> </ul>	7	電 柱	10	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電 柱</li> </ul>						
		10	5				計	10		8					
		18	15				8	その他の 人工物		15	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・錆びたトタン</li> </ul>			
計	61	44	4	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洗濯機</li> </ul>										
			2	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板の橋</li> </ul>										
2	狭い道 汚い道	29	14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・狭い道</li> <li>・汚い道</li> </ul>	9	ゴミゴミ ゴチャゴチャ	16	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ともかく汚い</li> <li>・ゴミゴミ</li> <li>・ゴチャゴチャ</li> </ul>						
		13	6				13	13							
		計	42				20	45		25					
3	看板と標識			26	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看板と標識</li> </ul>		計	74	50					
		計	26				13				10	工事中	7	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工事中の道・ 建物</li> </ul>
4	車			26	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車</li> </ul>		計	7	4					
		5	色が不調和				6				5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色が不調和</li> </ul>	11	暗 い	40
計	26			8	計	40		14							
									12	その他					
計	6	5	計	17	16										
						6	汚い川・ 空地	13	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・汚い川</li> <li>・未整備の空地</li> </ul>	分析不能	67			
10	2	合計	413												
計	23			4											

いるかを知るには不適である。しかもその評価は文章ではなくパターンとして、相互の比較がし易くなっている必要がある。そこで1枚毎の因子出現パターンを得るべく、分類カードの小タイトルの因子をスライド毎に集計し直す作業を行なった。この結果にもとづき、分類表と同じ12の因子肢を持つレーダーグラフを、全てのスライドについて作成した。(図2～3参照)

〈美しい〉



〈美しくない〉



(6) 第3次モニタリング

第2次モニタリングとは全く別に、研究者サイドで予め用意した景観構成要素(図4)に対し、何が見えたかを用紙に記入(チェック)させる実験を行なった。目的は、国際交通安全学会における中村良夫氏らの道路景観構成要素の誘目性に関する実験値<sup>注5</sup>に興味を持ったからで、その追認の意味を兼ね、何らかの比較資料が得られることを目論んだ。

結果は、事前に用意した構成要素一覧表が、国際交通安全学会の例とは異なり、当研究者サイドの推定で用意されたため、ほとんど出現しない因子があるなど、若干の問題があったが、見えたものを単に想起するだけならば、コマ秒以下の瞬間視で充分なことは追認できた。

実験では何度かのテストの後0.2秒の値が妥当と判断しこれによった。結果は極端に出現頻度の低いものをまとめて「その他<sup>注6</sup>」とし、先の実験同様12の肢を持つレーダーグラフとして表わした。被験者は先の実験とは異なる学生10名である。なお瞬間表示の実験装置は図5の方式に拠った。

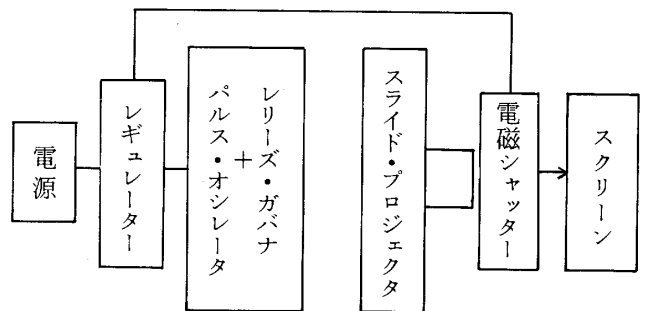


図-5 瞬間呈示実験装置の概要

構成要素	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
	建物	道路	歩道橋	標式	自動車 自転車	街路樹	遠い山 空 川	ガード レール	路側物 看板	電柱	門 塀	緑	石垣	歩道 人	その他
1															
2															
3															

図-4 想起法記入用紙

(7) 第4次モニタリング

先に選び出されたスライド121枚を図5の実験装置によってスクリーンに映し、アイカメラを装着した被験者に見せた。設定時間は映写1.5秒、インターバル1.4秒とした。この値は実験をくり返して行なった結果、最適と認めたものである。図5の装置に加えて、九大式のアイカメラと16mmムービーがセットされた装置を用いた。(図6)被験者数5名。

以上の実験の結果は、16mmフィルム上に注視点とその軌跡が表われているに過ぎないので、これを景観写真と重ね合わせる必要がある。この際ひずみやブレによってかなりの誤差が出ることが判っているが、ここでは予め画面の四隅に印したマークを視線が追い、しかる後に映写された画面を見るようにし、正確を期すにとどめた。

こうして得られた16mmフィルムを引き伸ばし、さらに矯正を加えた後、注視点の位置を丸い玉によって景観写真上に表示し、被験者が何をしていたかを調べた。なお第3次および第4次のモニタリング、実験は主に共同研究者藤浦が担当した。

(8) 色彩情報の読み取り

共同研究者山岸によって行なわれたこの作業は、第2次モニタリングによって得られた、因子カードを読み取ることから進められた。色に

言及した内容を集めた小タイトルには「色の美しさ」「青い空」「赤い鳥居」「緑がある」の4項目があるが、これに「暗い」「対比の妙」など関連ありそうに思われた項目を加えたものを中心に読み取りを行ない、結果を文章化した。

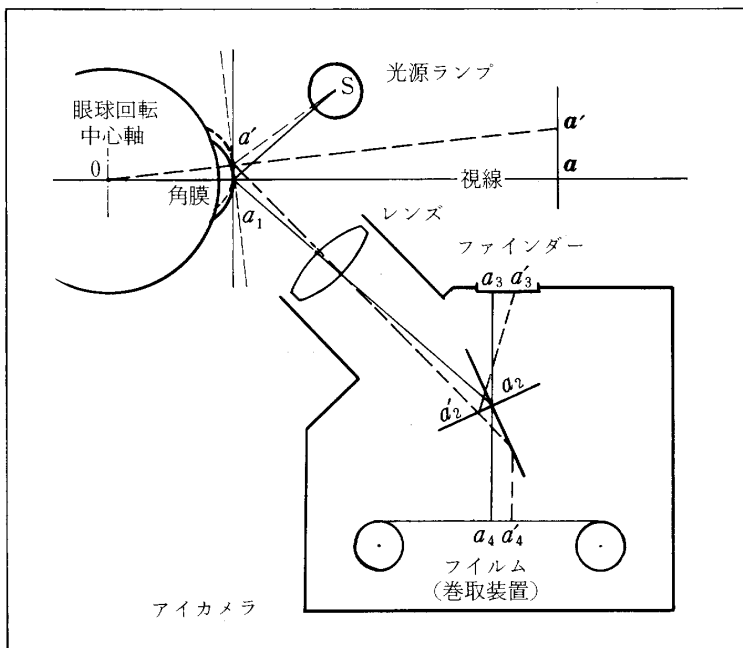
(9) フォトモンタージュによる実験

看板、標識などのいわゆる視覚表示数は「美しくない」景観の一因であったが、その原因を再度被験者に問い、例えば「形状」「色彩」「汚れ」などその細目を答えさせる。次にこれらの結果にもとづき、フォトモンタージュによってその原因の改善を試みる。しかる後にこれを最初に呈示したスライドと比較することによって、因果関係の度合を知ることができると考えられるが、共同研究者服部によるこの実験は、現在進行中であり、本報告では割愛する。

実験結果

紙数に限りがあり、全てのデータを掲載することはできないので、典型景観と思われる10サンプルについて、カードの細目を除く全ての実験結果を以下に示す。

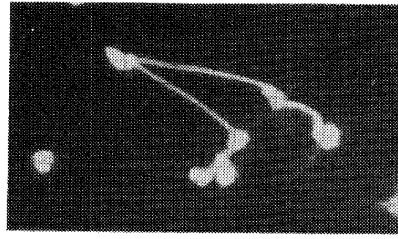
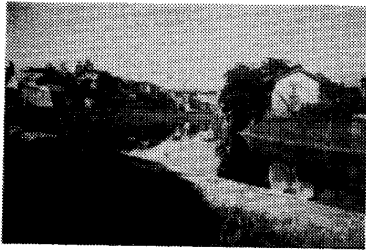
なお、各左端のスライド画面中の○印は、アイカメラによる注視点の位置である。明らかにハッキリと見えている視野は中心視より2°とされるので、画面上のハッキリと見える範囲は、ほぼこの○印の大きさと考えられる。



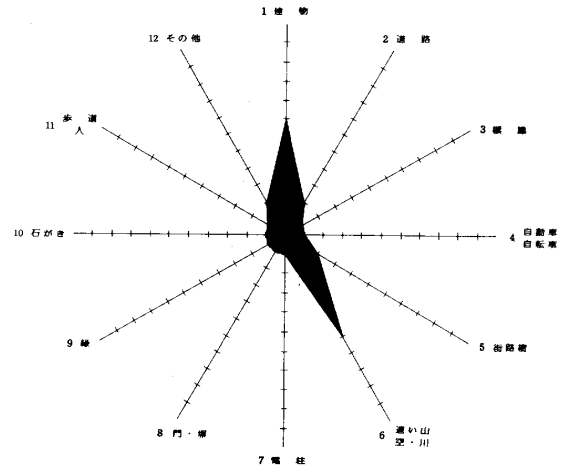
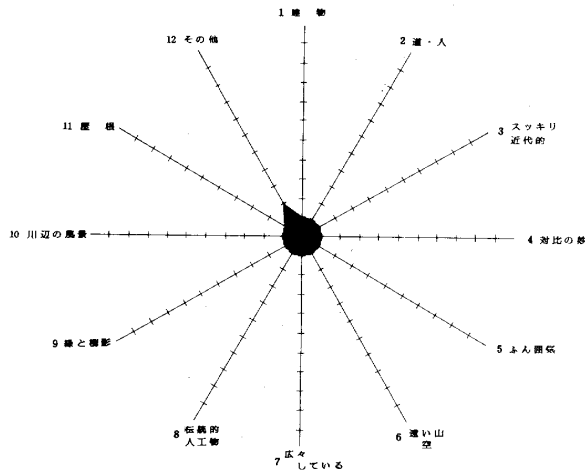
- 横から見たアイカメラの機構
- 実線は基本となる中心点を見た時の光
- 点線は に移動した時の光の線
- ファインダーで角膜で反射した光の位置をたしかめ記録する時は、ミラーを90度回転させフィルム側に光を当てる。

図6 アイカメラ(九大式)

003



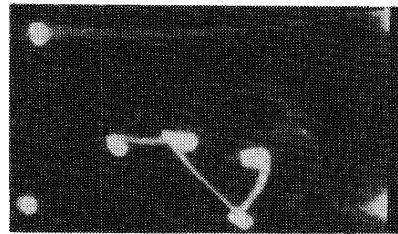
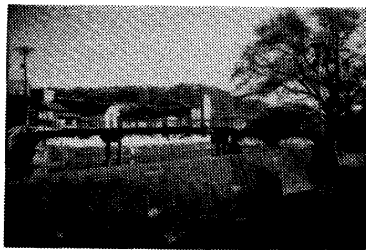
空や川がクッキリしているだけで、どことなくすがすがしく「美しい」景観に思えてしまうのは何故だろうか。浅の川べり朝の風景。



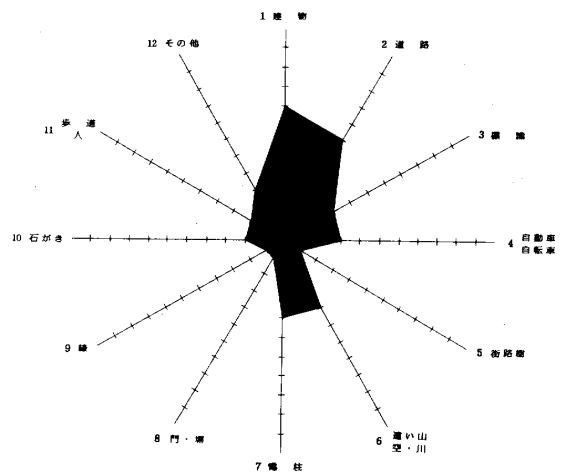
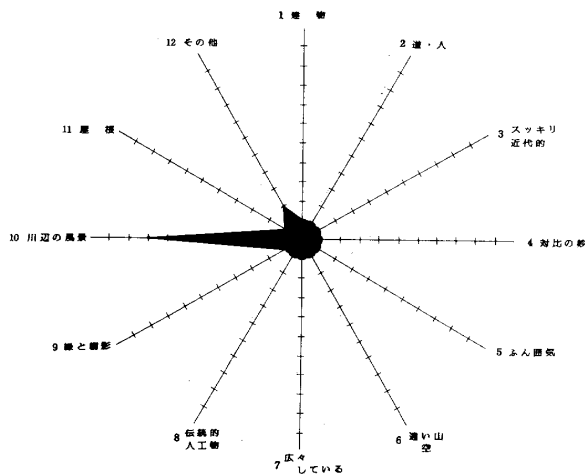
「美しい」因子

何が見えたか

005



川面はほとんど見えなくても、美しい橋の存在が美しい流れを想像させる。多くのアイカメラの被験者は橋を見ているが、この被験者は、僅かにしか見えない川面をのがさず見ているようだ。

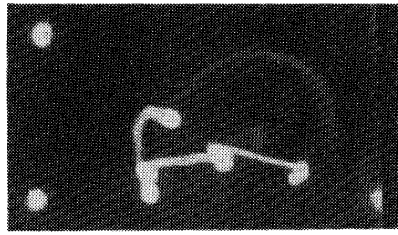
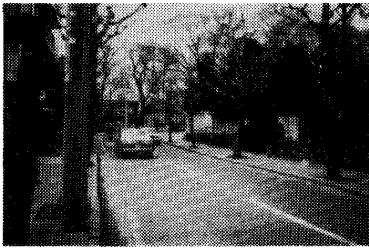


「美しい」因子

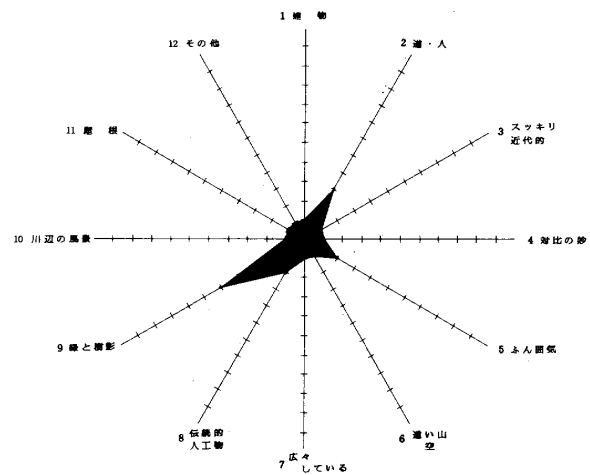
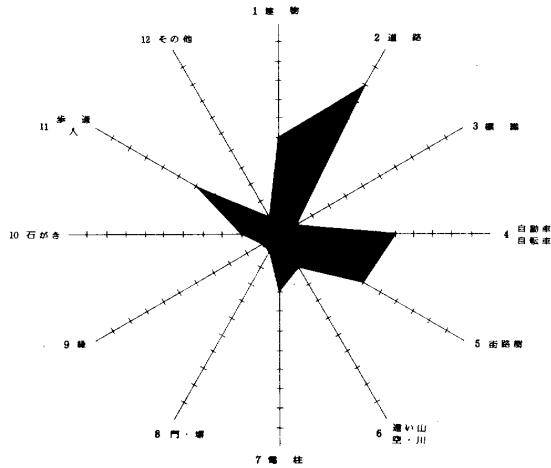
何が見えたか



029



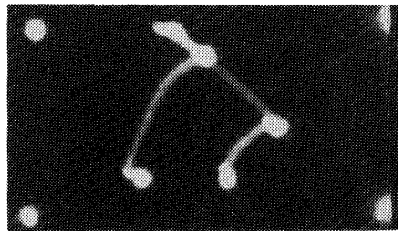
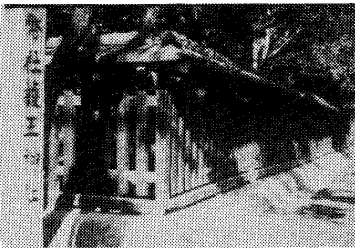
このアイカメラの被験者は、道と車しか見ていないが、他の被験者は全て街並木と緑を見ている。街並木は冬枯れているけれど、道もまあまあきれいで全体の雰囲気が良いといえよう。



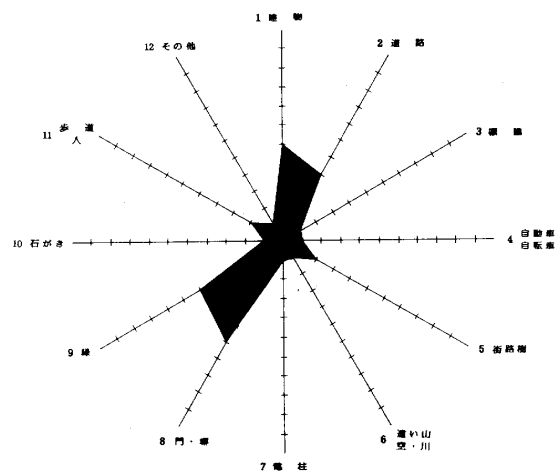
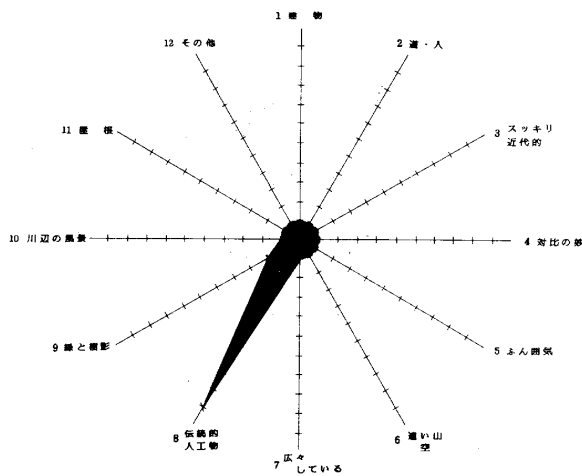
「美しい」因子

何が見えたか

037



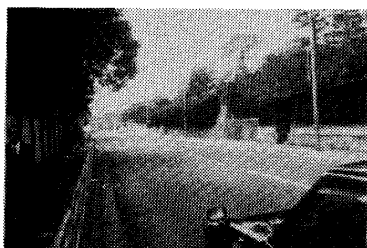
これはもう、この神社の立派なそして美しい桓根が全てといえよう。実際にここを歩いた場合はこの桓根越しにかい間見える庭のたたずまいがまた良い。



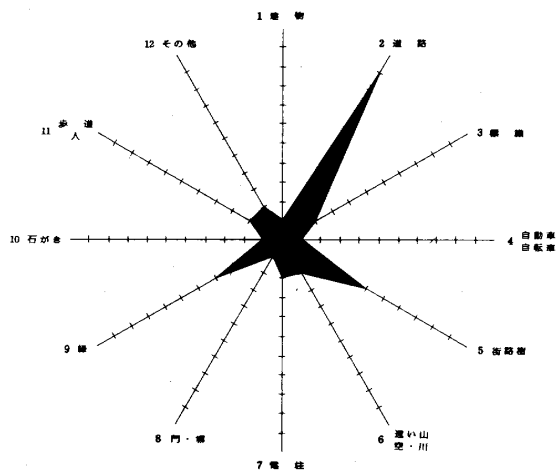
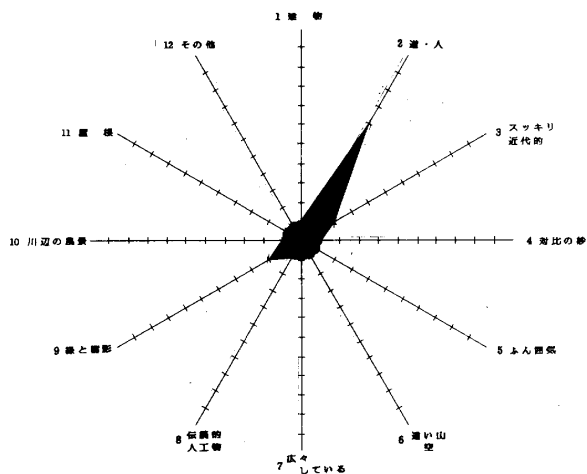
「美しい」因子

何が見えたか

073

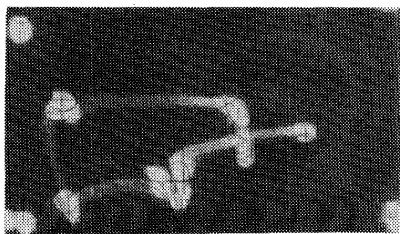
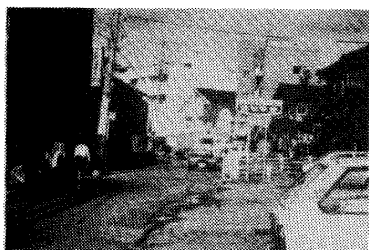


車にはどうしても眼が行ってしまうけれど、スッキリとパースペクティブが決った、のびやかな道は気持ちが良い。左右の緑がそれをさらに助けている。

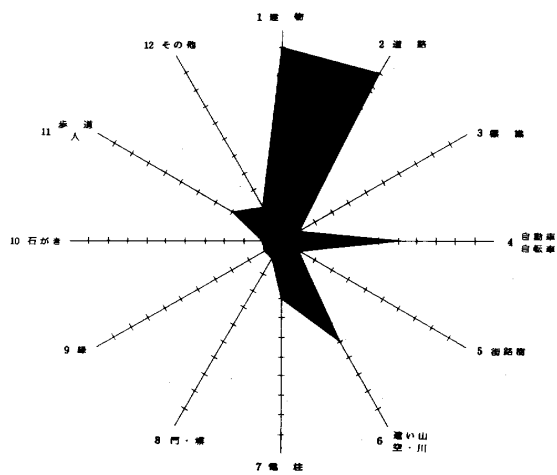
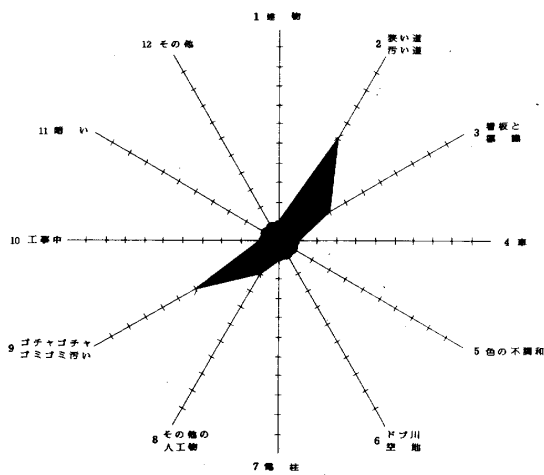


「美しい」因子

086

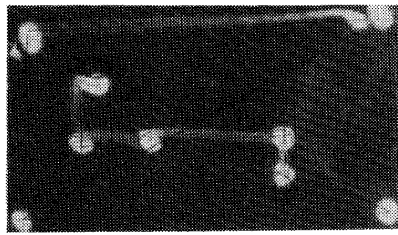
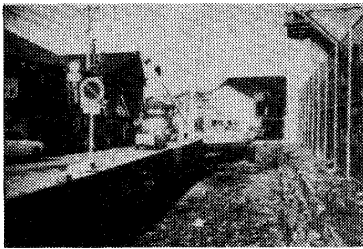


古い家屋と新しい商業建築、看板などがゴチャゴチャと混ざり合っている例、水たまりまでが汚らしく見える。

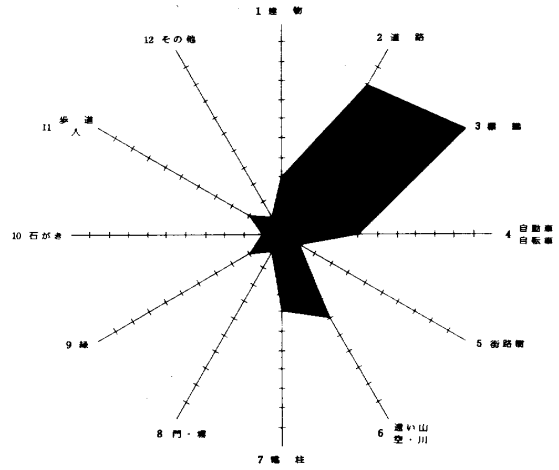
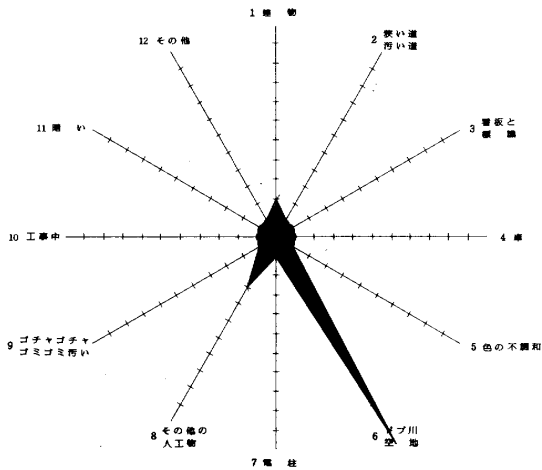


「美しくない」因子

何が見えたか

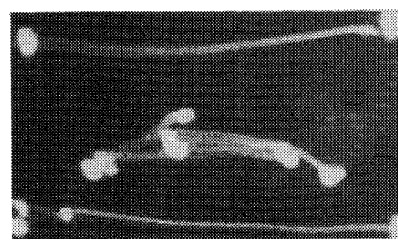
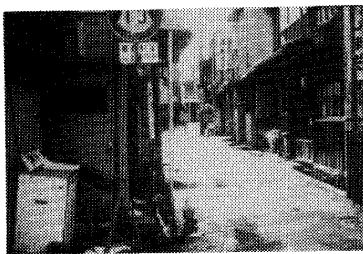


金沢自慢の用水も、水がなくなると、とたんに情緒を失い、汚く見えてくる。ゴミが投げこまれたりすれば、そこはもうドブ川のイメージでしかない。



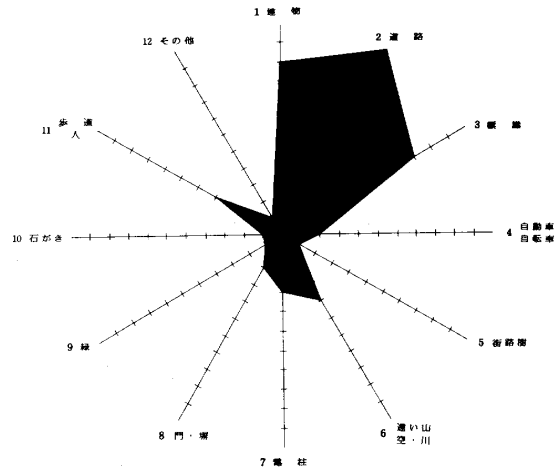
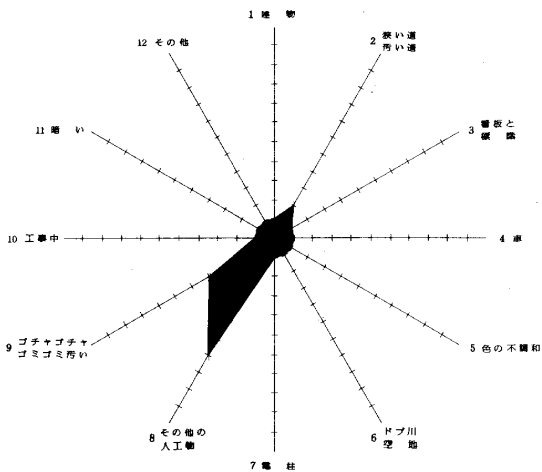
「美しいない」因子

090



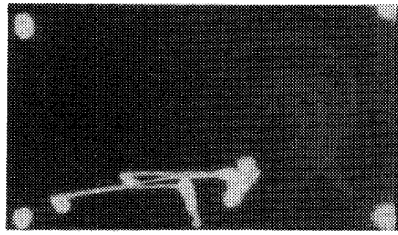
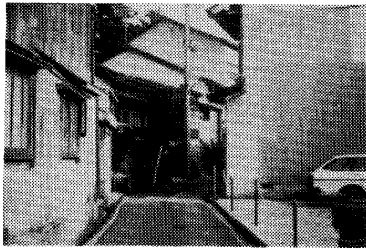
何が見えたか

見たくないものにもつい眼はいつてしまう。本来落ち着いた良い街並のはずなのに、無神経な洗濯機や工事中の標識、交通標識でぶちこわししている。道路も美しくはない。

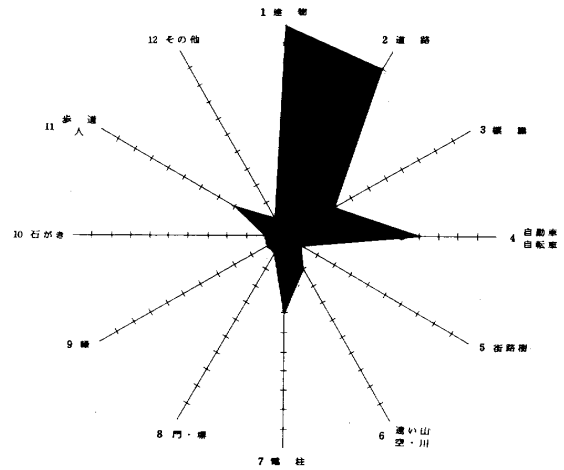
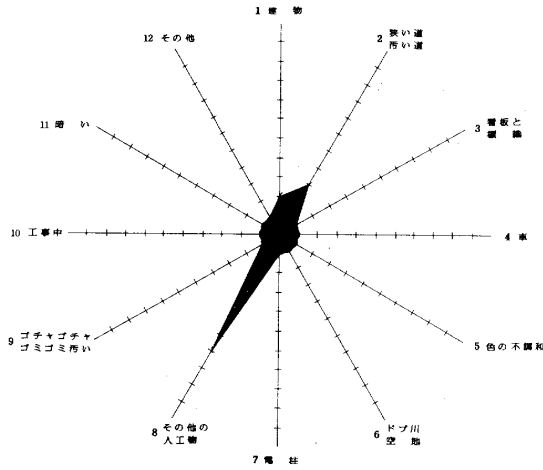


「美しくない」因子

何が見えたか

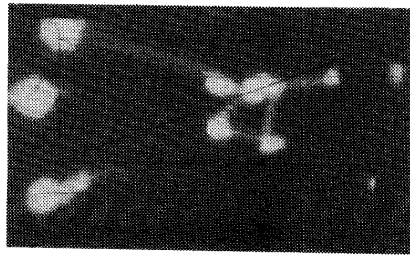


金沢の都心における典型的な虫食い景観である。波トタンの壁は一瞬たりとも眺めるに値しないものであることを示している。狭い道がここではわびしさを助長するだけである。

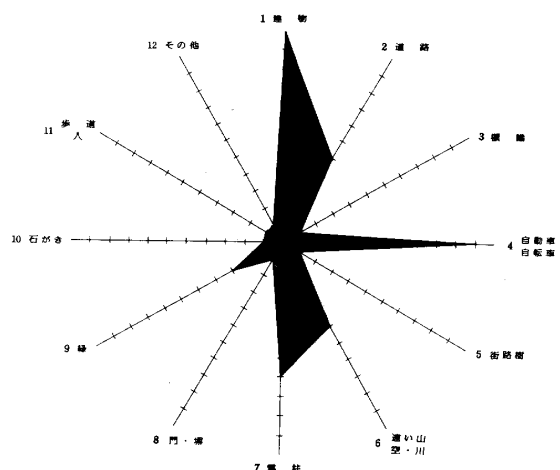
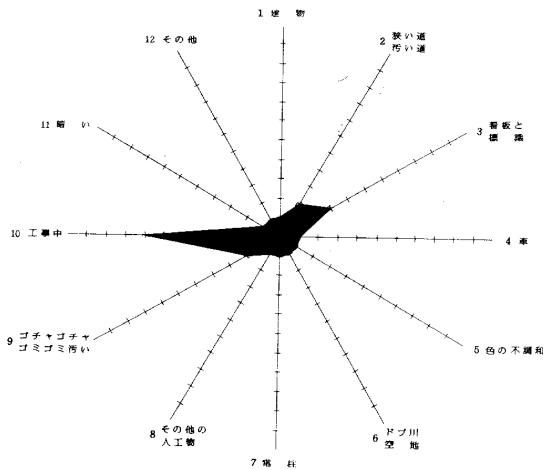


「美しくない」因子

何が見えたか



工事中の乱雑さは誰れの眼にも美しいものとは映じまい。看板と標識の無秩序がそれに輪をかけている。手前の美しい四ツ目櫃が倒されているのも無残だ。



「美しくない」因子

何が見えたか

## 結果の考察

第2次モニタリングにおいて、被験者に記述させて得られる因子カードは1210枚の予定であった。しかし結果は白紙を含め197枚の分析不能のカードが含まれていたことは、表1のとおりである。ここで16%強もの無効カードの出た原因を考えて見ると、第1次モニタリングによる「美しい」「美しくない」の振り分けが多数決によっていること、が先ず考えられる。中には1票の違いで「美しい」か「美しくない」か決ったものもある筈で、半数近くの被験者が映っているサンプルスライドの1次評価とは異なった印象を持つ可能性がある訳である。これが「わからない」「美しいと思わない」「むしろきれい」などの反応となって表われたと見ることが出来る。次にモニタリングでの映写の順序が、各々のスライドの評価に少なからず影響を与えている、と思われる節がある。例えば、ゴミゴミした景観の後に、ややましな景観が出るとつい「美しい」と感じてしまうことなどである。

三番目の原因は、上記に関わって、「美しい」スライドだけを連続して映したとして、必ずその中には「美しさ」の度合の高いものと低いものが混り合っている訳で、これが先に述べた順序などの原因と重なり合うと、どうして「美しい」のか「わからない」となることは大いに考えられる。以上が主な原因であり、被験者が1次と2次では異なった点はそれほど問題にはならないと思われる。

映写の順序によって評価が左右されることを防ぐには、順列をランダムに入れ代えて何度か実験をくり返す方法が考えられるが、枚数が多いため実際には困難視される。

さて「美しい」で最も多かったのは、カード数において124枚を獲得した「伝統的人工物」であった。これは表1の小タイトルに見る如く、格子戸やすだれや石垣や鳥居などであるが、調査地が、さすがに日本を代表する伝統都市であることを示している。次いで「道・人」が101枚「緑と樹影」が95枚で、この三項目で全体の49%(無効を除く)を占めており、街並景観の主

体をなす筈の「建物」は94枚で僅かの差で第4位となっている。一方「美しくない」景観因子においては「緑と樹影」は全く見られず、「建物」「狭い道・汚い道」「その他の人工物」が1.2.3位を占めていることが注目される。前者が具体的に「鳥居」や「石垣」を挙げていたように、後者では「洗濯機」や「錆びたトタン板」など、いわゆる工業製品の名が上っており、具体的に品名を記したスライド枚数は15枚、カード数で29枚にのぼっている。これに悪名高い「看板と標識」(同13枚と26枚)「電柱」(同8枚と10枚)そして「車」(同8枚と26枚)までを含めると、全体の40%が「建物」を含めた人工物で占められていることが判る。人工物の中にはゴミなどは含めてないので、何らかの用途を果している人工物が、このように景観をして「美しくない」と感ぜしめる要因となっていることは、今回選定されたコースが、むしろ他の地域よりも情緒に富むと見られるだけに、考えさせられる点である。

一方12のコードを横断して小タイトルの多いのは、「緑がある」など植栽と「遠景の山」や「水に映る風景」などの自然にかかわる要因で「空」「上天気」を含め12タイトルに上っていることが注目される。これは小タイトルの構成比では46%と群を抜いて多い。カード枚数にして182枚25%弱ということになる。都市の景観を左右するのに、緑などの自然要因がいかに大きな力を果しているかが、この結果からも帰納されよう。

他方人工物が景観を損う元凶とは言っても、建物やこれに付随する屋根瓦や塀、さらには石垣に至るまで、伝統的で風情のあるものは高い評価を得ていることは先に述べたが、ただ、それらは古ければ良いというものではなく、いわゆる虫くい現象によって空地化・駐車場化された住宅地跡などは、隣家の壁面があらわにされ古さが逆に汚く見えてしまうようだ。壁面をおおった波トタンは、新しくとも「美しい」とは決して映らない。スライドNo.112がその典型である。「家の壁が汚い」はカード数で10枚あった。また周りの景観と合致しないアンバランスさを感じさせるときも古さは評価が逆転して

しまうようだ。「周り和不調和」18枚がこれを証している。はっきりと「色が不調和」と指適されたものは6枚であったが、不調和の元凶は古い街並に原色の派手な工業製品が入り込むことによって発生しているように思われる。この他「美しくない」では全体に、狭く美しいところにゴチャゴチャ、ゴミゴミと汚らしい古い家が建っている、というイメージが伝統都市特有の狭い道、あるいは暗さと共に大きな数値(計136枚)を示していることが注目される。

また、「美しい」要因で評価される「川辺の風景」にしても、ゴミなどで汚れていたり、水が無かったりすると一転して「美しくない」の要因に変わることも興味を引く。当然かも知れないが川もただありさえすれば良いわけではないといえよう。こうした意味もあって、第3次モニタリングの何が見えたか、の実験結果は現在のところあまり役立っていない。

第4次モニタリングのアイカメラによる実験について。第3次実験よりもさらに恣意性を排して、物理的に眼がどこを見ていたかを調べた訳であるが、被験者による差が大きく、かつ画面上に表れた点の位置が、誤差も含め、絶対にそのものズバリであるのかどうか(奥行方向は調べることができない)があいまいであるなどいくつかの問題点がある。しかし大よその傾向は判り、例えば画面上の暗よりは明の方に集中しがちなこと、例えば遠景の建物などが日に映えて並んでいるような場合、注視点はそれらを眼でなでるが如く移動しているし、緑の中に夕日に映える白い壁が見える場合など、必ずそこへ集中するなどである。

またパースペクティブがはっきりしている画面では必ず注視点はそこへ収束し、そうではない画面では見据える場所を求めてか、注視点は広く画面全体にバラまかれる傾向がある。「美しい」景観因子の典型である街並木なども、これをリズムカルに追っかけている様が出ているし、川にかかる美しい橋や、きれいな水の流れなどはこれを確実にとらえていることが判る。(サンプルNo. 029, 005)

逆に、ゴチャゴチャとした「美しくない」景

観の中では注視点がさまよいがちなのは前述のとおりながら、標識や看板、洗濯機、ゴミ、水たまりなど、見苦しいものも確実に見のがしていないことも判った。(サンプルNo. 086, 090)

なお、この実験は失敗が多く、時間がとられるところから、全てのサンプルは実験できなかった。実験に供したのは、第1次モニタリングにおいて、「美しい」「美しくない」双方で高い得点を得たサンプル24枚である。読み取りに当たっては数人の被験者の注視点を1枚の画面に入れて見た。

最後に色彩についてであるが、「美しい」景観に関し、直接第1因子として色を挙げているものに小タイトル「色の美しさ」があり、カード枚数にして35枚、スライドで15枚もあったことは特筆に値しよう。被験者がグラフィックデザイン専攻の学生であったとはいえ、景観を美しいと感じしめるのに、色彩がいかに力を果しているかを知らしめるものといえよう。「青い空」「赤い鳥居」「緑がある」を含めると69枚がこれに相当する。「対比の妙」の中にも若干の色に言及するものがあるので総数としては70枚を越えることになる。これは全体の9%強にあたる。

具体的には、京都の町に見られた、緑の森を背景にした「赤い鳥居」が、抜群の支持を得ている(3枚のスライドに対し16枚のカードが支持している)。真っ直ぐな道の突き当りにこれを配した、いわゆるアイストップの効果は、これに優るものは一寸見当らない美しさを有している。鮮やかな丹色の存在は、ランドマークとしても役立ち、また思い出景観色ともなっているのである。

黄や白の壁と黒い屋根瓦の対比、雪と屋根瓦の対比など、対比の美しさを挙げたものも少なからずあったが、色彩対比が、風景や景観のイメージ構成に寄与する率の高いことを示している。このことはまた、色彩は選択されて見られる証しともなっている。

一方「美しくない」因子中でも12のコードの一つとして「色の不調和」が挙げられており、調査地のような伝統都市にも、健全な市民の感覚を逆なでするような色彩異物が、少なからず

出現していることが分った。

また撮映した季節のせいもあるが、「暗い」を挙げたものが随分多かった(カード40枚, スライド14枚) 暗い色彩に、狭く、汚ないイメージが複合して、被験者たちにはおよそ美的には映らなかったようだ。

## おわりに

景観サンプルとしての振幅が大きい方が、研究遂行上より多く手掛りを得られると考え、歴史的な美観地区と一般街路の双方が含まれるようコースを設定したが、モニタリングの結果はやや当然すぎる答えに集中し、微妙な点での解明が逆に甘くなってしまったようだ。サンプル撮影時期もやや問題があったし、周到に行なった筈のサンプル撮影方法、セレクト方法も問題がなかったとは言いきれない。

このように反省点は多いのであるが、今後の研究の基礎資料としては多くのものが得られたと思う。

なお、この研究は日本デザイン学会の第29回研究発表大会(昭和57年11月・於武蔵野美大)において発表したもので、そこでの質疑応答を紹介し、現時点における報告のまとめとしたい。以下Qは質問、( )内は質問者、Aは当研究者の答えであるが、これには後になって書き加えた部分が含まれていることをお断りしておく。

**Q:**(筑波大・平)天候によってサンプルとするスライドの評価は変わるのではないか。

**A:**全てのサンプルを同一の条件で撮るとして若干は変わる可能性もあると思われる。それは被験者の判定要因に「上天気」「青空」など、明らかに晴天であるが故に「美しい」とした者がかなりあるからで、これは止むを得ない。但し雨によって「美しい」となる景観はどのようなものか、これは試して見る価値がありそうである。

**Q:**(武蔵野美大・三輪)「どちらでもない」のサンプルを捨てたというが、明らかに「美しい」ものや「美しくない」ものは切り切っているので、中間のものをこそ調べるべきではないか。

**A:**たしかにその通りで意味のあることと思うが、平々凡々の景観は調べても何も得られない

恐れがある。ただ、僅少の差で落されたものに関しては、大いにこれを分析して見る価値はありそうなので、今後の課題としたい。

**Q:**(千葉大・杉山)最初景観を「シークエンス」として扱っているように思ったが、途中で「フレーム」の研究に移行している感がする。一体どちらなのか。

**A:**フレーム個々を数多く調べることによって「シークエンス」景観をも考察して行くという立場は許されぬものであろうか。

シークエンスに重点を置くなら、収集はしたが結局実験には使用しなかった8mmフィルムの活用なども考えねばならないし、スライド上映の順序ももっと慎重に考えねばならない。また金沢と京都を別々に実験することも必要になってくる。ただ、フレームで研究を続けるにしろ今後この両者の対比は、比較研究を進めるためには、いずれ必要になってくると思われる。

最後にアイカメラによる実験は、ビデオ(VTR)による方がより正確(千葉大・杉山)との指摘があったが、器材を整えて後フォローして見たいと考えている。

以上まとめると、本研究はさらにキメ細かにフォローして行く必要があるが、特に第2次モニタリング以降使用しなかったサンプルのうち、僅少差で除外されたものの中に、景観判断の鍵を握る重要な問題がひそんでいる可能性がある。この点は発表終了後も複数の研究者から指摘を受けたし、当研究者自身もそのように考えるに至っている。またサンプルを得た「地域全体」は、被験者にどのような印象を与えているのか、ある程度シークエンスとしての研究を進めることも必要となって来よう。この点は東京芸大の稲次教授より後に指摘されたが、本研究の今後の課題として受け止めたい。

最後に本研究遂行に当って被験者をつとめてくれた学生諸君、並びに資料整理をつとめてくれた黒川鈴代さんに深甚なる謝意を表す次第です。

(なお、本稿は研究者表者が、各分担研究責任者より提出を受けたレポートを整理総合し論述したものである。)

## 注

- 1) 「街並景観における塀のデザイン研究1」昭和55年3月, 金沢美術工芸大学々報第24号。「街並景観における塀のデザイン研究2」昭和57年3月, 同上誌第26号。以上黒川威人。  
「色彩景観考・金沢」昭和51年3月, 金沢美術工芸大学々報第20号, 「都市景観の形成と美的環境をめぐって(上)」昭和50年10月, 環境研究第10号。「都市景観の形成と美的環境をめぐって(下)」昭和51年1月, 環境研究第11号。以上山岸政雄等。他。
- 2) 黒川は工業デザイン, 藤浦は工業デザインおよび人間工学, 山岸は商業デザインおよび色彩環境, 服部は商業デザイン。
- 3) カメラの三脚に取り付けて使用する装置。カメラを水平に保ち360°の撮映が可能。
- 4) 集団反応測定機: 竹井式。
- 5) 国際交通安全学会誌 vol. 8, No. 3, p.16~27。  
(昭和57年8月)
- 6) 「歩道橋」と「ガードレール」および「路側物・看板」はほとんど出現しなかったため, まとめて「その他」へ入れた。